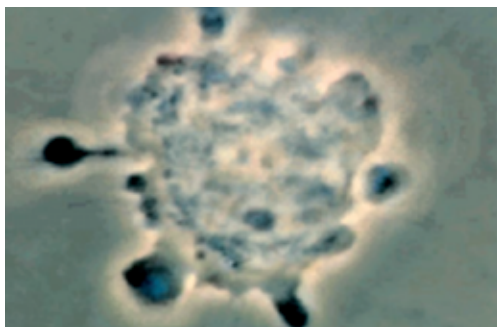


# 死の側から生を見る分野を 確立

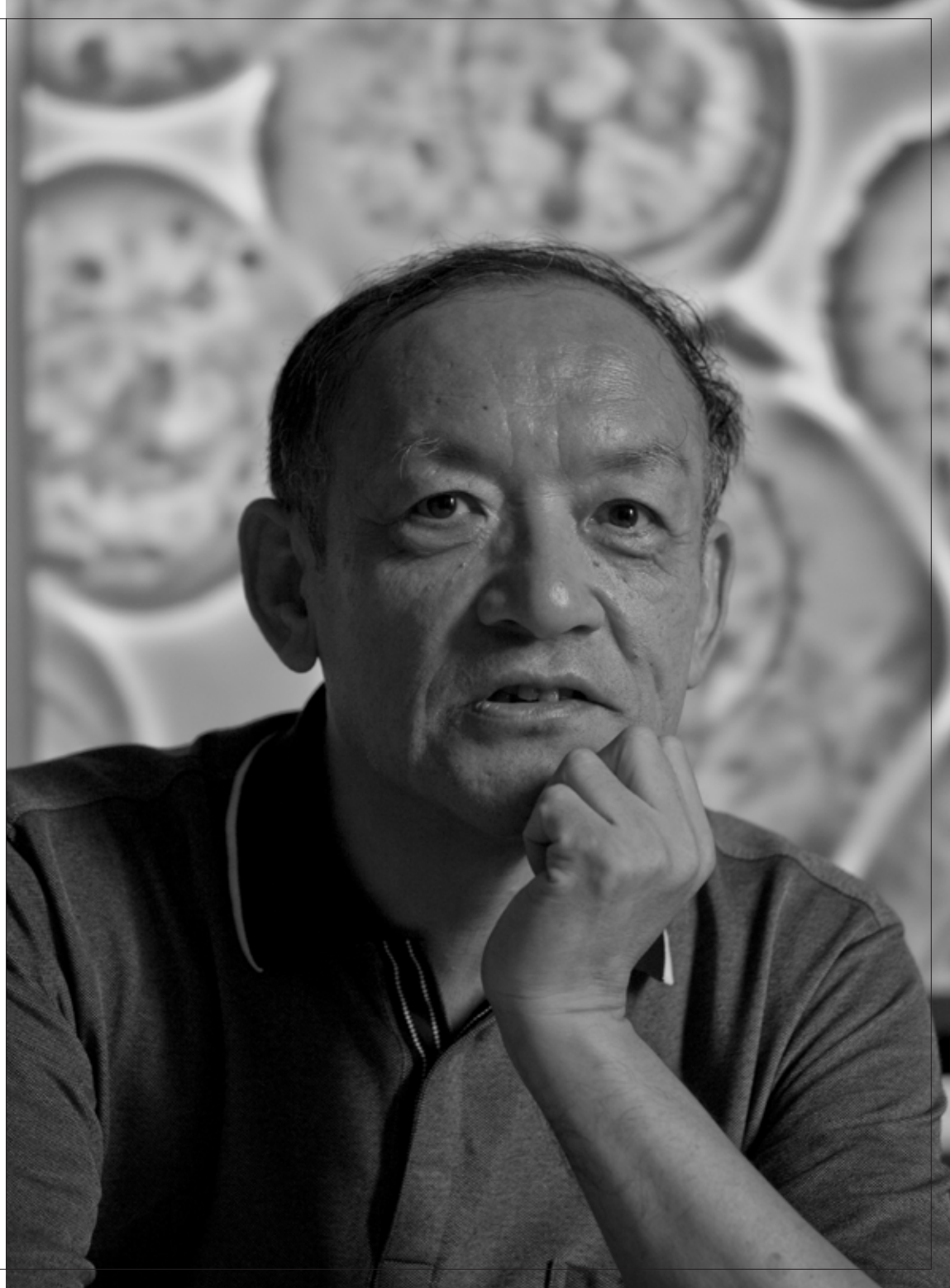
京都大学大学院教授  
長田重一

## 死の側から生を見る研究

アポトーシスという言葉は専門外の人も知っている言葉になってきました。プログラムされた死とも言われ、体ができてくる時にも新陳代謝時にも死ぬことは、オタマジャクシのしっぽ。今では人間の体の中で毎日約一〇〇億個もの細胞がアポトーシスで死んでいることがわかり研究者もふえましたが、最初この現象に出会った時はふしぎなことがあるものだという思いでした。細胞を培養して死なせたら失敗だとうなだれていたのに、今では死ぬと「やったあ」となるのです。まさかこういう研究をすることになるとは思いもしませんでした。



光学顕微鏡で捉えたアポトーシスの瞬間



## のんびりした子供時代

生物学と出会ったのは大学一年の時、それまでとくに生きものに強い関心をもっていたわけではありません。高校生の頃まで、あまり将来のことを深く考えもせず来たというのが正直なところですよ。

生まれは金沢、昭和二四年（一九四九年）ですからまだ太平洋戦争の敗戦の影響が残っている、日本が貧しい頃です。父も戦地から帰ってきたばかりです。ただ、金沢は京都や奈良と共に空襲に会わなかったもので、そういう意味では恵まれていたと言ってもよいでしょう。小学校の頃の写真を見ると、金沢大学の構内で遊んでいるものが多いのです。昔はのんびりしていたから大学の中で子どもたちがセミ捕りなんかしてたのです。虫捕りをしたり、小さい顕微鏡を買ってもらってドブの水を見たりもしましたが、一番関心があったのは機械、それも壊すのが面白かった。ラジオとか目覚ましとか。蓄音機を壊した時はひどく叱られました。

兼六中学校に進んで生徒会会長になったり、クラブはバドミントン部に入っ  
て県大会に行ったり、楽しく過しました。中学の時の最大の思い出は二年生の時の三八豪雪ですね。屋根の雪を下ろすから道が雪で一杯です。屋根の雪を下ろしたところと下ろしてないところすごい高低差ができます。吹雪でもあり、

学校まで普段は二〇分で行けるのに二時間かかったんです。しかも、やっと着いたら校門に先生がいて「遅刻だ。立ってろ。」今思い出すとひどいなあと思いますが、当時はそんなものかと思ってました。時代ですね。教科では数学が好きでした。自分で考え、解けていく面白さがあるでしょ。覚える科目はあんまり好きじゃありませんでした。

とにかくのんびりしていたところへ、いよいよ高校受験の時が来ました。さてと頑張り始めた時に、先生が金沢大学付属高校に推せんしたら行くかと言ってくれたんです。市内の中学から無試験で入れる枠があったんです。もちろん行きますよ。それが秋のことです。後は自由。それはよかったです。高校の最初の試験で一五〇人中百何十番という順位でショックでした。しかも金沢の中では選ばれた家庭の子弟が通っているわけですから、それまで近所の仲間と遊びまくっていた時と言葉が違うんです。これは勉強するしかないと思いましたが。後で海外へ出た時に、最初言葉がわからない間、仕事するしかないという感じになったんですけど、それと同じ気持ちでした。

## 生物学との出会い

昭和四三年（一九六八年）東大に入るのでありますが、ここで現在につながるきっかけとなる『遺伝子の分子生物学』を教科書にした講義に出会います。丸山工作

四歳頃、家の前の路地で。



従兄弟と。(左側…本人)



家族と。(中列右から二人目…本人)



中学生の頃。生徒会長を務めた。

